

娘よ待っている

NZ地震 被災学生の父帰国へ

ニュージーランド南部地震で行方不明となっている富士山 外国語専門学校生の運本慶喜さん(22)の父豊さん(68)が2日、倒壊したビルを訪れた。訪問後、抱えていた苦しみについて「1%だったのが0.5%になり、0.1%に……」と報道陣に語った。豊さんは3日に帰国する。――1面参照

「現地に来たときに、わずかな望みを持って飛んできた」。だが、現場を初めて訪れた豊さんがバスの懸垂しに見た風景は、激しく倒壊したCTVビルの姿だった。泣き崩れる家族も。「わずかな望みも絶たれたという感じがしました。自分の心を納得させる作業の連続だった」と声振り絞った。

んです。青森の弘前城とか温泉に行ったら思い出さなかった。娘への思いは戻さない。見学後、日本に残る家族にも電話で状況を説明した。こちらの気持ちを察してか、「分かった」と淡々と相づち

「被災者の救済基金をおねがいします」。2月27日、シエームス・ベンソンさん(36)は、JR倉敷駅で日本人学生らと一緒に呼びかけた。クライストチャーチで生まれ育った。14歳から空手を習い始めて日本に興味を持ち、25歳で来日。2007年から、市の国際課で国際交流事業を担当している。

姉妹都市、倉敷支援の輪

「救済基金を」 出身男性ら

を打っていたという。「私たち家族は、子どもたちが短い人生を精いっぱい生きてきたことを褒めてあげたい。子どもたちが私たちに与えてくれたことを、これから的人生に生かしていきたい」

「被災者の救済基金をおねがいします」。2月27日、シエームス・ベンソンさん(36)は、JR倉敷駅で日本人学生らと一緒に呼びかけた。クライストチャーチの家族はみな無事だったが、倒壊したビルにあるカンタベリーテレビ(CTV)で働いていた知人と、連絡がとれない。「無事を信じたいですが、とても不安です」



●募金活動をするシエームス・ベンソンさん(左)とマイケル・ゴーマンさん(中央)とJR倉敷駅、高橋正徳撮影●募金を呼びかける妹尾和輝さん(中央) 同駅

豊さんは3日にニュージーランドを離れ、帰国する。その前に、市内に設置された献花台に花束を供えるという。どれだけの時間がかかるかは分からないが、「娘が帰って来るのを待つ、その後のことを考えたい」。

もうすぐ訪れるホワイトデーには、慶喜さんにハヤシライスをこっそりすると約束していたという。父は、娘に謝った。「約束を守る」ことができなくなって、申し訳ない」(クライストチャーチ 石原孝)

住む古美術商マイケル・ゴーマンさん(66)もいた。24歳の時に日本に来た。白壁の、古い倉敷の街並みに魅せられ、永住を決めた。クライストチャーチで倉敷の物産展を開き、倉敷にはニュージーランドの通商使節団を招いた。両市が交流を深めるきっかけとなり、1973年、姉妹都市となった。

「友よ返信を」 スタイ経験 高校2年生 遊び、街を案内してもらった。帰国後もメールのやり取りを続けている。 テレビで見た地震後の街は、あの時の記憶と全然違う。崩れた大聖堂、がけきの山。ニックさんにメールを送ったが返信は来ない。「心配です。早く返事がほしい」

募金の輪の中に、クライストチャーチ出身で、倉敷市にトチャーチに派遣している「青年生活体験団」の一員として現地に滞在した。ホームステイ先の4人家族の長男、ニックさんは同じ年だ。一緒に

この地震で、倉敷市は被災地に消防員らを派遣し、貯水タンク2千個を送った。市役所などに募金箱が置かれる。街の惨状に心が痛むが、姉妹都市の思いは、きつと届くと願う。「大聖堂も必ずリビルド(再建)する」。そう信じている。